2020.11.18

チンパンジーの実験のこぼれ話（2）

小嶋祥三

1 頭のチンパンジー（パン）を生まれた時から育てた。音声発達が研究テーマだったが、当然ほかの行動も気になった。チンパンジーは生後 50 日過ぎから、環境の刺激に応答してよく声をだした。注意をひく環境の刺激は世話をするヒトだったろう。ヒトがベビーベットをのぞき込むと、パンは大きな声で鳴くことがあった。この点は本に書いておいた（*A search for the origins of human speech*）。問題は声を出す前の時期だ。パンはわたしの顔を、興味を持って？、ジーッと長く見つめることがあった。これがその後の音声と関係するのか、しないのか分からない。ヒトの乳幼児にも同じような行動があるのだろうか。

パンが音声をできるだけ出すように訓練していた。その中で鳴き分ける訓練もした。バナナなどの固形物には[a]、ミルクには[o]と鳴いたら、それらを報酬として与えた。これも本に書いておいた。言語には要求と記述の機能があるという。ある時、パンは床に落ちているバナナ（か、その皮？）を見ながら、バナナに向かって[a]と鳴いた。その後、そのバナナを食べたかは覚えていない。この時のパンの音声を仮に音声言語の原初的なものとすると、それは要求だったのか、それとも記述だったのか。或いは、両者が入り交じっていたのか。ヒトの幼児ではどうなっているのだろうか。

スーパーなどで、幼児がお母さんのスカートを掴んで歩いているのを見掛ける。周りに興味をひくものがたくさんあるが、母親から離れるのは怖いのだろうか。母親のスカートが随分と延びている。全く同じことがパンと私の間にも起こった。パンはわたしの実験着（白衣）の裾を握りしめ、わたしを引っ張るようにして歩き回った。おそらく、チンパンジーの母子でも同じようなことが起こるのではなかろうか。と、ここまで書いて思い出した。パンが大きくなってきたので、棚のある大きなケージに移した。その時に気がついたのだが、パンは床に下りることはなかった。下は危険だということが刷り込まれているのだろうか。

パンとわたし